広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『少年』における光子像がいかにして支配者になり得たか
Author(s)	ジョアナ トラウトン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1992 : 151 - 156
Issue Date	1993-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039340
Right	
Relation	

『少年』における光子像がいかにして支配者になり得たか

ジョアナ・トラウトソ

『少年』は谷崎潤一郎の若き日の作品である。発表されたのは1911年（明治44）6月。谷崎は25才である。『少年』については、作者自身のコメントがある。

1「『少年』は前期の作品のうちでは、一番キズのない、完成されたものであることを作者は信じる」

タイトルからも判るとおり、この作品で、中心になるのは尋常四年の萩原の栄ちゃん、「私」、とその友人「塙信一」、塙の家の馬丁の子供で、信一たちより「一二年上の生徒」の仙吉、そして、信一の姉で「十三四の」光子という4人の子供である。大人と言えるほどの人間は、塙の家の「女中」と「私」が呼ばれて行った当日に、塙の家の庭での稲荷の祭りに店を出している屋台の男女くらいのものなのだ。この4人の子供の遊びは『少年』の中心になっている。

『少年』の全体構造は、時間的には4つの場面になって形造られている。物語の時間は「もう彼れ此れ二十年ばかりも前」の早春から陽春のころ、具体的には2月末のある日から4月5日へと経過していくのである。塙の屋敷内にある稲荷様の祭りの日、雛祭りの日、そして水天宮の縁日の昼と夜との出来事を軸として、組み立てられている。

その作品は語り手、「私」の「十くらゐ」のころからの回想形で書かれている。「私」によってその少年たちのいろんな遊が描写されている。その遊びは官能的な、乱暴な性質で兄弟の信一と光子の間の権力闘争にエスカレートするということである。最初から、信一の立場は少年たちの中で一番強い。4人の遊びにおける繋がりは常に信一（強者）→「私」と仙吉→光子（弱者）となっている。信一が富豪である塙家の主人の子であり、「私」は信一の友人であるが、以前は髪屋の幸吉や船頭の鉄公などと日頃遊び仲間であったのだ。仙吉は信一の家に使われる馬丁の子であり、主従関係は拭えない。光子は信一の姉だが信一が「泣いたっていいんだよ。毎日喧嘩して泣かしてやるんだ。姉さんだって彼れはお妾の子なんだもの」と光子を侮蔑しているように、正腹の総領息子と、それとは対等でありえない妾腹の女の子である。たとえば、少年たちのそれぞれの力関係を示す為

「仙吉、この狐を縛るんだからお前の帯を貸し、さうして暴れないやうに二人で此奴の足を抑へて居ろ」
「栄ちゃん、此奴の帯を解いて猿轡を嚙めておやり」

と「狐ごっこ」の場面のように「私」も仙吉も信一に指図され、光子は「いつも一番いやな役廻りになって非道い目に合はされ」て、信一の世界の秩序、というのが大人の社会の価値観に基らいている人間関係を維持し続ける。

つまり、最初に信一が絶対的な優越権を内包することだがこの作品のクライマックスは塙の家の西洋館の一夜の逆転劇である。その夜は光子は信一と光子の支配者と被支者の関係を逆にして、その時から「さしも傲慢な信一も、だんだん日を経るに従ってすっかり姉の家来」となっていく。その社会的の地位が底く、以前いじめられていた光子はどうやってその関係を逆転したのか。

まず最初に述べておきたいのは信一の政権が最初から安定していたかどうか疑問であるということだ。光子はある場面の出来事に余り参加しない場合でも間接的に作品全体の中心になるようである。というのは、稲荷様の祭りの日に遊び場所が光子の座敷であり、雛祭の日の遊びの軸は光子の雛人形で、水天宮の縁日の夜の出来事が行われる場所は光子しか入れない西洋館なのである。それに加えて、作品全体に万遍なく流れてくる「幽玄な微妙な奏楽の響き」―光子の弾くピアノの音も大切だと言える。

そのピアノの音はうっとりさせる力がある。たとえば、「私」が初めて聞いた時から「ecstasyの尾を心に曳」いており、この時点で「私」には光子の虜となる素地が出来上っていたと考えられる。そのピアノの音によって光子が信一の権力を知らない間にむしばむようである。最後にその音が呪術的なものになる。というのは、物語の最後の場面で、西洋館の内部、仙吉と「私」は光子のために手を後ろに縛られ、額に火をともした蠟燭を立てさせられ、眼をとじたまま、「別世界の物の音のやうに」聴きいるのである。そこで「私」は心身の双方を呪縛されているようになっている。「微妙な楽の音に恍惚と耳を傾けた儘、いつまでも眼瞼の裏の明るい世界を視詰めてすわって居」る「私」の肯目の視野に、響きとともに光子の白い顔、その「神々しく整った、端厳な輪廓」が浮かぶ。その時、「私」と仙吉は「陶酔」し、まるで光子の家来になる。おそらく、力関係を逆転する為に使う武器の中でピアノの音がもっとも強いのではないかと思う。確かにその音の力は時によって底飽されないものだろう。おそらく、それを回想して語る現在においても、その音の記憶は20年昔と変わらずに、「私」の心を魅惑でつつみこんでいるはずである。そうして、この「不思議な響き」を思い出すことによって光子の力が永遠になるのではないかと考える。

そのピアノの音は「別世界の物の音」として描写されている。その「別世界」とはまるでいど欧米であると言える。はじめに聞いたときも、2度目、ピアノの音は「私」に陶酔と西洋館に対しての好奇心と憧れとをひきおこす。窓から「姉様が顔を出しはすまいか」という想い、「中はどんなになって居るんだろう」という憧れ。そうして、ピ

アノの音によって光子は西洋館に対しての好奇心を高める。しかし、ピアノの音を聞く前にその新しい世界、すなわち、欧米に対する「私」の好奇心がまったがとりわけ西洋館に対して「私」の心は引き寄せられていく。すでに、はじめて塙の家を訪れたとき、西洋館は「私」の注意をひいていた。

「前を通るとこんもりした邸内の植込みの青葉の隙から破風型の日本館の瓦が銀鼠色に輝き、其のうしろに西洋館の褪紅緋色の煉瓦がちら〳〵と見えて」

姉と喧嘩して座敷を出た信一が「私」と連れ行ったのは、「西洋館と日本館の間にある欅や榎の大木の陰」である。その場でピアノの響きを聞いた「私」は西洋館に対する好奇心をつのらせる。仙吉の出現によって「私」の心は西洋館からしばし遠ざかるが西洋館との関わりが全くなくなる訳ではない。3人の遊び場になるのは「西洋館の裏手の塀の隅にある物置小屋」なのであるが西洋館に対する「私」の好奇心には、光子に対する関心が隠微に含まれている。

そうして、光子の反旗が翻った場は西洋館であることは意義があると考える。西洋館に自由に出入りできるのは光子だけであるのでその物語の最後の場面に参加する3人の子供の中でその部屋になれている子が光子だけであるのだ。それで、光子の立場は「私」と仙吉の立場よりつよいのではないかと思う。たとえば、西洋館になれている光子に対して何でもないものはその部屋に初めて入った「私」にとって

「西洋蠟燭の光は朦朧と室内を照して、さま〳〵の器物や置物の黒い影が魑魅魍魎の跋扈するやうな姿を四方の壁へ長く大きく映して居る」

そうして、恐怖を感じた「私」が混乱して「彼の青大將は果して本物だが贋物だが、今考へて見てもよく判らない」ほど判断力が弱くなっている。その弱くなった「私」は何でもするように何でも信じるように納得させやすいものになっていると言っても過言ではあるまい。その混乱した状態になっている「私」にとっては欧米と光子との関連が強まる。「私」の前に現れた光子の姿は彼の眼に、西欧の乙女の半身像と区別つかないものになり、ついに彼は、光子に拝跪することになる。そこに現れ出た光子の姿にこそ、真の支配者たる権威が付されているのであろう。

光子は神格化されている。

「暗い中にもくッきりと鮮やかに浮き出て居る純白の肌の色、気高い鼻筋から唇、頤、西頬へかけて見事に神々しく整った、端厳な輪郭——これが伽噺に出て来る天使と云ふのであらうかと思ひながら、私は暫くうっとりと見上げて居たが」

既に「私」は光子を「天使」の如く「見上げて」いる。

西洋の油絵に関しては谷崎の興味深い文章がある。

2「土蔵の観音開きの前の、板の間を跨いだところに離れ座敷の入口があった。その一棟は母屋より後に何かの心算で建てられたものらしく、さっぱりとした庭に面した二階家になっていたが、当時は誰一人住む者もなくて森閑としていた。私はそこへも時時密かに這入って行って足音を忍ばせながら二階座敷へ上って見たり、階下の六畳。間の地袋の上に安置してあるマリア像の前に行んだりした。（略）私には、西洋の女神の前に掌を合はす祖父の心持がぼんやりと理解出来て、何となく薄気味悪くもあった半面に、自分もいつしか祖父のやうになるのではないかと云ふ風にも感じた。

だれもいなく森閑とした階建での離れ座敷は『少年』のしきりに「二階」「二階」と唱えられる西洋館を髣髴とさせる。

3「日本画に於いて絵の美しさを感じたことは殆どなかった。そして私の脳裏に最も強い印象を与へたものは、隠居場の床間に置いてあった聖母マリアの像であった。（略）非常に立派な額縁の中に収まってゐた薄暗いその像は云ひ知れぬ気高さと、恐ろしさと、美しさとを以て迫った。そこには、少年の頭では明確に掴めなかったけれども、何か「永遠の女性」と云うやうなものつまるのが朧げに感ぜられた」

谷崎のマリア像に対する崇尊するような言葉は「天使」のように「神々しい」光子　無関係ではない。その上、ここに谷崎の女性崇拝も初期作品に現れる西洋崇拝の一つ形を見ることができると考える。

しかしながら、光子が神格化されてもキリスト教の聖母マリアは全くエロティックな姿ではないが光子支配者に為に自分の性的エネルギと美さを武器と使っている。物語の最初から信一の虜となった「私」は「信一の気高く美しい器量や人を人とも思ぬ我が儘な仕打ち」はもちろん光子にも当てはまる。「私」は消像画に天使のような「気高さ」を感じ、少年たちは光子に「奴隷の如く」使われる。また、信一の「美しさ」とは「可愛らしい女のやうな」ものであり、疑似的な女性美でしかなく、「さも美しい雪姫の器量」とうたわれる光子に及ばないだろう。

それに加えて、光子は非常にエロティックな美物な姿として描かれている。消像画の説明では「緩かに胸を紋戸色の衣の蔽い……」が実物では「脇から腰のまはりへかけて肌を軟と緊めつけた衣の下にはしなやかな筋肉の微動するのが見えて居る」に変わり、「気高い鼻筋から唇……」は「牡丹の花弁を卸んだやうな紅い唇」に、「下げ髪」は「溢れやうにこれぼれかゝる黒髪を両肩へすべらせて」に変わってい

る。

その水无宮の縁日の夜、西洋館の中で、光子の支配者になる可能性を与える美さが絶頂になる。同時に光子は最も残酷になっていることは無関係ではないと私は考える。谷崎の友人になったドナルド・キーン先生によれば

4「彼（谷崎）は、むろん美しい女性が好きでしたが意地の悪いサディスティックな女性にもっとも魅力を感じるようでした」

そして、光子像は谷崎にとっては非常に好みの女性である。その上に、谷崎にとってはサディズムが西洋と関連しているものだそうである。

5「（谷崎の）最大の不満は、日本に女性のサディストがいなかったことです。ヨーロッパには男性に苦しみを与えることを無上の喜びとする女性がいるが、残念ながら日本にはいないというのが大きな不満でした。」

だから、「西洋の乙女」と似ている光子は残虐好きな女であることは意義であると考える。

谷崎は女性崇拝家として知られていた。谷崎自身は自分がフェミニストだと認めた。谷崎は自分の女性観を永井荷風と比較して次のように語っている。

6「私はフェミニストであるが先生（荷風）はさうではない。私は恋愛に関しては唐物崇拝教徒であり、ファナティックであり、ラディカルで生一本であるが先生はさうではない。先生は女性を自分以下に見下し、彼女等を玩弄物視する風があるが私はそれに堪へられない。私は女を自分より上のものとして見る。自分の方から女を仰ぎ見る。それに媚びする相手ではなければ女とは思はない。」

（谷崎も荷風も間違っていると私は思う。女性は見下すべきものではなく見上げるべきものでもないのは当然である。）

これはきっと「神々しい」光子には当該する、と言える。ついに、光子が廻りの少年たちの支配者になり、彼らに見上げられるようになる。大人社会に共ういている人間関係はそっくりそのままで続けられる日本館では信一の権力を戦排するのが不可能であるが最後の場面で出来事が日本館から西洋館まで、昼から夜まで移動すると信一の世界の秩序が破滅して光子がついに支配になる。

注

(1)『明治大正文学全集谷崎潤一郎篇解説』

(2) 谷崎潤一郎『幼少時代』(『文藝春秋』明30·5)

(3) 谷崎潤一郎『饒舌録』(「改造」明2·4)

(4) ドナルド・キーン『日本の面影』(人間大学4月~6月1992年)

(5) ドナルド・キーン op.cit.

参考文献

安田孝『谷崎潤一郎「少年」をめぐって』(人文学報1981年1-196-25)

新保邦寛『「少年」を読む』(北海道教育大学紀要(人文科学編)1986年3-36-2-8)

石井達規『谷崎潤一郎論-その初期作品について』(日本文学論集1987年3-11-14)

森下和昭『谷崎文学の女-顔のない女たち』(国文学踏査1981年8-11-9)

小関和弘『谷崎潤一郎「少年」の世界』(和光大学人文学部紀要1986年3-20-12)

西荘保『少年における光子像』(稿本近代文学1989年11-13-10)

遠藤祐『谷崎潤一郎』(明治書院(明62·9))

平山城児『谷崎潤一郎』(清水書院(明41·10))

上野鶴子・小倉千加子・富田多恵子『男流文学論』(筑摩書房1992年)